

石の文化センターをつくってゆこうと、夢はふくらむ。

その一方で、小さいながら「雫石創作農園組合」も一つの組合。収益をあげ経営管理を整えてと、キッチンと運営せねばならない。3年目の問題点をみんなで相談して、進めてゆかねばならない。

夢と現実の間で、農業軸と地域振興の間で。大きな自然の中で、小さな胸をときめかせて

いる、今日この頃である。

まえがきにも触れましたが、経験の浅いニューファーマーの私達。「こうしたほうがいいよ」というアドバイスがありましたら、ぜひ教えて下さい。（おわり）

雫石創作農園組合

代表 福本 敏

〒020-0573

岩手県雫石町南畑28-132

電話・FAX 019-695-2197

ジャガイモと映画 『ホタル』、『マンホール』、 『男はつらいよ』

邦画ではなかなかジャガイモの出るシーンに出会うチャンスがない。

わが国でのジャガイモ消費量は、1人年間17キロほどしかないから、数倍食べる国と比較して、当然と言えば当然のことだ。

かつて『いも侍』のタイトルにひかれて、映画をみたことがあったが、サツマイモのことでがっかり。北海道ではジャガイモを『いも』と呼ぶので、『いも姉さん』に対する『いも兄い』ぐらいを期待して見たが、まだジャガイモもサツマイモも見たことがない人が多い時代の侍の出てくる映画だった。

そんな話を、あるワインを楽しむ集いのおりに映画に詳しい札幌の横田昌樹さんに話したところ、『邦画にもあるよ』と話してくれたのが、『ホタル』と『マンホール』。

『ホタル』は、降旗康夫監督、高倉健、田中祐子の熱い愛と勇気を与える映画。多くの方は健のセリフ「二人で一つの命じゃろうが」に関心があるのでしょうが、私にはかつての戦友が南富良野からジャガイモを送るシーンに関心があった。

『マンホール』という映画は、鈴木貴之監督、安

田顕、三輪明日美らが出演するもの。女子高生の希と勤勉実直な小林正義の設定で、その真面目な警察官をしている小林の処へ帯広にいる母親から新ジャガが送られてくる。警察官として真面目に勤務する青年がその生真面目さゆえに自分のホームページの中で援助交際に行った女学生を戒める書込みをする。それをたまたま見た女学生が警察官に逆切れしてパソコンストーカーとなり、警察本部へ嫌がらせをし始める。そうした経過の中で郷里からジャガイモが届き、持って行き場のない気持ちをジャガイモにぶつけるのだとのことである。タイトルは、願いが叶うという噂の“夢のマンホール”に由来し、舞台は札幌地方になっている。

2002年元旦、おせちも雑煮も食べることなく、腸閉塞のため入院するハメになった。これが幸いして、山田洋次監督の有名な映画『男はつらいよ 寅次郎忘れな草』を寝ながら見ることができた。この時のマドンナ役はリリーこと浅丘ルリ子。寅が網走市郊外の酪農家を手伝って柴又に帰ってくる。そのとき旅で出合った歌姫リリーが『とらや』を訪ねてくる。その夜の歓迎の宴で、テーブルに粉ふきジャガが盛られていた。この山は戦中を想い出させるほどの量。寅はカラーテレビはないが、「人を愛する気持ちがあるから」上流階級なのだと語るが、ジャガイモもこれをサポートしていた。

（ポテトエッセイスト 浅間 和夫）